

はじめに

第一章 明治期の豊臣秀吉観の変遷

第一節 顕彰の始まり

第二節 日清戦争と海外進出の英雄

第三節 韓国併合と朝鮮進出の英雄

第二章 大正、昭和初期の豊臣秀吉観の変遷

第一節 退潮する顕彰

第二節 大阪における顕彰

第三節 英雄待望をめぐる顕彰

第三章 戦時中の豊臣秀吉像の変容

第一節 勤王の英雄として

第二節 陸進出の英雄として

第三節 南方進出の英雄として

おわりに

はじめに

慶長3年(1598年)、天下人であった豊臣秀吉は伏見城にて62歳でその生涯を閉じた。亡骸は京都市の阿弥陀ヶ峰山頂に葬られ、麓には豊臣秀吉を祭神とする豊国神社が建立された。しかし慶長20年(1615年)大阪夏の陣で豊臣家が滅亡すると、江戸幕府によって豊国神社は破却され、豊臣秀吉の廟墓も荒れるがままに放置されてしまった。しかし明治元年、明治天皇の詔勅によって豊国神社は再興され、秀吉は再び日の目を見るようになった。その後の秀吉は時局に合わせて様々なベールを着せられていく。

本論文では、豊臣秀吉が明治維新後どのように扱われ、顕彰されていったのかを明らかにする。具体的には、出版物やメディアにおける論説、政府や活動団体の動きを考察する。また時局の動きと合わせて見ることで、秀吉観の変遷も明らかにする。時期としては、明治天皇が豊国神社再建の勅書を発した明治元年から大東亜戦争が集結する昭和20年までを分析の対象とする。

近代における秀吉観の研究として、秀吉死後から現代までの秀吉観を通史的に扱った津田三郎氏の「秀吉英雄伝説の謎」、高木博氏の「近代日本と豊臣秀吉」がある。また橋爪節也氏の「大大阪イメージ」では大正から昭和初期にかけての大阪における豊臣秀吉の扱われ方が紹介されており、能川泰治氏の「一五年戦争と大阪城」では大東亜戦争期の豊臣秀吉顕彰について詳細な記述がある。しかし近代日本における秀吉観の変遷を流れとして追ったもの、また当時の新聞、雑誌でどのように取り上げられていたのかを扱っている論文は少ない。そこで本論文では、こうした研究を踏まえつつ、近代日本における豊臣秀吉観がどのように変遷していったのか、豊臣秀吉は様々な時局においてどのような役割を果たしたのかに注目して分析を行う。

なお、特記がない限り、戦争の呼称は当時において用いられていたものを使用する。また、豊臣秀吉の文禄・慶長の役に関しては「朝鮮出兵」で呼称を統一する。

第一章 明治期の豊臣秀吉観の変遷

本章では、江戸時代に公に扱われることのなかった豊臣秀吉が明治政府によって再び注目され、顕彰されていく過程を考察する。明治天皇の詔勅が発布された明治元年から秀吉に正一位が贈位された大正4年を対象とする。

第一節 顕彰の始まり

本節では、明治時代において豊臣秀吉はどのように顕彰されていったのか、また当時の人々やメディアはこうした顕彰に対してどのような反応を見せたのかを明らかにする。

江戸時代を通して公の舞台に現れることのなかった秀吉が再び歴史の表舞台に登場するのは、明治元年の明治天皇による豊国神社再興の詔勅¹である。詔勅には、江戸幕府によって破却された豊国神社を再興し、秀吉の権威を復活させることで、東照宮を始めとした江戸幕府の権威を貶める意図があったと思われる²。詔勅にあるように秀吉は明治政府に「国家ニ功アル」「皇威ヲ海外ニ宣ベ」英雄として認識されていたので、後の豊臣秀吉顕彰の動きの中で度々引用されることとなる。このように豊臣秀吉は明治期において、「国家の英雄」「海外進出の英雄」として顕彰されていくことになった。また、当初明治政府は秀吉の墓の場所を正確に認知していなかったことから、大阪に豊国神社を建設することを命じていた。しかし一ヶ月後、京都の阿弥陀ヶ峰の麓に建設することを再度命じたため、京都と大阪の間で誘致合戦が発生したが、最終的に京都に決定し明治期の秀吉顕彰は京都が中心になった³。

その後、秀吉顕彰は政府主導で行われるようになる。明治6年に明治政府は豊国神社を別格官幣社とし、国費を以て再建に当たった。また豊臣秀吉に縁のある備中足守藩、豊後日出藩⁴に命じ、廟墓に仮囲いを設置させた。その後、明治12年に大阪中之島に豊国神社が建設され、明治13年には京都豊国神社遷宮式が行われるなど明治時代初期は豊国神社を中心に豊臣秀吉顕彰の動きは進んでいった。遷宮式に伴う神事では市民も参加する大規模な祭が行われ、盛り上がりを見せている。しかし当時の新聞からは明治天皇の詔勅にあるような秀吉顕彰の跡は見えず、神事として盛り上がったことしか読み取れない⁵。明治20年の新聞の社説⁶でも秀吉はナポレオンとともに立身出世のお手本として書かれるのみであったことから、明治政府の秀吉顕彰方針は未だ国民には徹底されず、江戸時代以来の「庶民の英雄」「立身出世の英雄」として見られていたと思われる⁷。

1 「有功ヲ顕シ有罪ヲ罰ス経国之大綱況や国家ニ大勲有之候者表シテ顕スコト無之節ハ何ヲ以テ天下ヲ勸励可被 遊哉 豊臣太閤側微ニ起リ一臂ヲ攘テ天下之難ヲ定メ上古列聖ノ偉業ヲ継述シ奉リ 皇威ヲ海外ニ宣ヘ数百年之後猶彼ヲシテ 寒心セシム其国家ニ大慰勞アル古今ニ超越スル者ト可申抑武臣国家ニ功アル皆廟食其勞ニ酬ユ当時 朝廷既ニ神号ヲ追 諡セラレ候処不幸ニシテ天其家ニ祚セズ一朝傾覆シ源家康継テ出子孫相受ケ其宗祠之宏壯前古無比豊太閤之大勲ヲ以テ 却テ晦没ニ委シ其鬼殆ト飢ントスルニ及候段深歎 思召候折柄今般 朝憲復古万機一新之際如此之慶典挙サルヘカラス 加之宇内各国相雄飛スル之時ニ当リ豊太閤其人之如キ英知雄略之人ヲ被為得度被 思食依之新ニ祠宇ヲ造為シ其大勲偉 烈ヲ表顕シ万世不朽ニ被為垂度被 仰出候列侯及土庶豊太閤ノ恩義ヲ蒙リ候モノ不尠宜シク共ニ合力シ旧徳ニ可報旨 御 沙汰候事」(『豊国会趣意書』明治30年)

2 津田三郎『秀吉英雄伝説の謎』(中公文庫 平成9年)

3 同上。

4 備中足守藩は豊臣秀吉の正妻高台院の甥に当たる木下利房、豊後日出藩は同じく甥に当たる木下延俊を藩祖とする藩であり、これら木下氏は豊臣氏を本姓としていた。

5 「大阪中之島公園に豊臣秀吉祭る神社を新築 娼妓・芸妓の砂持ちが始まる」(『読売新聞』明治12年4月15日朝刊2面)

6 「立身出世の説」(『読売新聞』明治20年6月29日朝刊1面)

7 江戸時代には『絵入太閤記』や『絵本太閤記』が出版され、人気を博していた。一介の農民の子から身を起こして立身出世、戦国乱世の時代を駆け抜け、天下人となる秀吉出世譚は当時の庶民の夢であった。(中島誠一「秀吉一代記の数々」)

またこの時期の教科書でも同様の傾向が見て取れる。文部省が明治7年に発刊した『改正史略』⁸、明治8年に発刊した『日本略史』⁹では、秀吉の関白就任、朝鮮出兵など、後の教科書では秀吉の勤皇を強調して書かれる部分ですら天皇と関連して書かれていない。

これら初期歴史教科書に明治政府の秀吉顕彰方針が反映されていないのは、検定制度が無かったためと考えられる。明治12年に教学聖旨が発表され、さらに明治14年にはその具体化である小学校教則綱領、そして後の国定制に繋がる開申制が始まる¹⁰。それ以前の教科書では政府の意志はあまり反映されず、江戸時代以前の秀吉観で教科書が作られていたと考えられる。

江戸時代の秀吉は数多の太閤記にあるように判官鼻眞の性質も併せ持った「庶民の英雄」「立身出世の英雄」であった¹¹。また小規模なものを除き、対外戦争が無かったことから朝鮮出兵などにあまり関心が向かなかつたため、明治政府の顕彰方針が浸透せず、江戸時代の秀吉観が大半を占めていたと考えられる。

その後、明治26年になり、『小学国史談』¹²が発行される。この教科書では、朝鮮出兵において明が講和の使者を送った際、「明主より遣したる書に、『汝を封じて、日本国王となす』の語ありしかば、秀吉、大に怒り、『吾れ、何ぞ、えびすどもの封を受けむ。且、吾れ、日本国王とならば、天皇をいかにすべき』」と、秀吉が皇室を尊重していた様子が記述されている。一方、同年に発行された『帝國小史』¹³は勤皇精神を反映した教科書で、楠木正成や織田信長は天皇に尽くした事績が紹介され、明治に入り祭神として祀っている神社が別格官幣社とされたことについても記述された。しかし豊臣秀吉に関しては天皇との関連性は全く記述されていない。このことから、日清戦争以前の教科書では秀吉の勤王性について注視されず、共通の認識もなかったことが分かる。また、後述する明治31年に行われる予定の豊太閤300年祭¹⁴も桓武天皇の遷都記念祭に合わせて前倒ししようとする議論¹⁵が生まれていることからわかるように、明治時代前半はまだ勤皇の英雄としての秀吉顕彰は盛んではなかったと考えられる。

一方、明治32年には歌舞伎座の狂言「太閤軍記朝鮮巻」において秀吉は取り上げられているが、朝鮮公使館が、朝鮮王子が加藤清正に囚われるシーンをめぐって、国体を辱めるとの抗議があり、公演中止になり一部差し替えられる事態も発生している。「絵本大功記」「木下蔭狭間合戦」など江戸時代より続く演目がある他は、歌舞伎界では秀吉人気はあまり盛り上がりを見せなかった。また桂太郎が秀吉を孝霊天皇第三王子の末裔とする説¹⁶を発表するなど政府側による秀吉顕彰は一定程度継続されていた。

また、当時の知識人、庶民の秀吉観が雑誌から読み取れる。例えば『穎才新誌』¹⁷においては「民力ノ困弊未タ医セサルニモ頓着セズ、遠征無名ノ大軍ヲ挙テ絶海万里鷄林七道ヲ蹂躪セント欲シ、為メニ貴重ノ財貨ヲ損耗シ、無辜ノ生靈ヲ摩爛スル」¹⁸と、朝鮮出兵を痛烈に批判するものが多い。その一方で、秀吉の天下統一については江戸時代からの秀吉観が続いており、全ての投稿が賞賛している¹⁹。また其ノ心ヲ王室ニ存シ、能ク国体ヲ辱シメサ

(市立長浜城歴史博物館『神になった秀吉』(サンライズ出版 平成16年))

⁸ 明治7年に北畠茂兵衛によって編集され、文部省によって刊行された。

⁹ 明治8年に木村正辞、師範学校によって編集され、文部省によって刊行された。

¹⁰ 滋賀大学附属図書館編著『近代日本の教科書のあゆみ 明治期から現代まで』(サンライズ出版、平成18年)

¹¹ 前掲、『秀吉英雄伝説の謎』

¹² 明治26年に東久世通禧によって書かれ、国光社より発行された文部省検定教科書。

¹³ 明治26年に山県悌三郎によって書かれ、文学社より発行された文部省検定教科書。

¹⁴ 豊臣秀吉は1598年に死去したことから1898年は死後300年にあたり、記念式典が計画されていた。また豊臣秀吉は姓の豊臣と官職の太閤を合わせ、豊太閤という尊称で呼ばれていた。

¹⁵ 「豊太閤300年祭の繰り上げ実施を検討中」(『読売新聞』明治26年3月22日朝刊2面)

¹⁶ 「桂中將が豊太閤の系図編纂 父筑阿弥の真筆から英雄の人物像浮き彫り」(『読売新聞』明治26年2月18日朝刊2面)

¹⁷ 明治10年に東京印刷会によって発行された日本初の全国的子供向け雑誌。投稿者は12~13歳が中心となっており、明治23年~明治29年にかけて度々秀吉に関する論説が発表されている。

¹⁸ 西海迂人「豊太閤」(『穎才新誌』732号(東京印刷会 明治24年))

¹⁹ 浅野金兵衛「豊太閤論」(『穎才新誌』787号(東京印刷会 明治25年))など

ルニ至リテハ、古今未タ嘗テ及フ者アラサルナリ」²⁰など勤王性に繋げる一節も一部存在する。このことから当時の庶民の間には様々な秀吉観が入り混じっていたことが分かる。

一方、史学会の日下寛に代表されるように、「この花の他国に優れたるを公のおもひしりて皇国の誉を世に輝かさんとの下心なりけむもまた知るべからず」と秀吉の勤皇を示す論説²¹はあったものの、数は少なく、明治政府の秀吉顕彰方針は国民にはあまり広まっていなかったと言える。

以上のように、明治時代初期における秀吉顕彰は「国家の英雄」「海外進出の英雄」として新たに顕彰すべく政府主導で行われたものの、大きな時局の変化も無かったことから、江戸時代からの秀吉観を覆すには至っていなかった。

第二節 日清戦争と海外進出の英雄

本節では低調だった秀吉顕彰が盛り上がりを見せていく過程について明らかにする。

まず、既述の秀吉顕彰の流れを変えたのは日清戦争であった。陸海軍が朝鮮半島に出兵した際に、『読売新聞』は秀吉による朝鮮出兵時の地図を付録として掲載し²²、また『国民之友』においても「日清戦の時局柄、過去の戦いに触れるべき」との論説が登場するように、日清戦争は国民に朝鮮出兵を想起させた。また、大森金五郎（学習院教授）は日清戦争に際し、「其の頃自分はこの日清戦役に対して如何なる感想を懐いて居たかと云ふと、矢張り勝敗に就いて非常な心配をして居た。日本が負けはせぬか、太閤秀吉のやうな事になつては大変だ。」と朝鮮出兵を否定的に捉え、想起していた。しかし、日清戦争後には「我國は世界の一等國に列した。世界の強大国であると云ふ感が起つて来た。そこで日清戦役後に日本の歴史を回顧して見ると、以前とは見方がズッと違つた。太閤秀吉は偉大なる人物である。秀吉の外征は偉いと云ひ、同じ秀吉を見るに附いて世人の考がズッと違つて来た。」と後に回想することになる²³。以上のように、日本が初めて海外進出を果たした日清戦争によって、日本史上最後の対外戦争であった朝鮮出兵に注目が集まり、それに伴い豊臣秀吉への注目度は高まり、その評価にも変化を及ぼしていた。

したがって日清戦争終結後、豊臣秀吉顕彰は豊国会の活動もあり加速していく。豊国会とは明治 23 年に旧福岡藩主黒田長成を会長に豊臣恩顧の大名家、政府役人が参加し、秀吉廟墓の再建を目標として創設された組織である。創設当初から明治 31 年の豊太閤 300 年祭などを企画していたものの、日清戦争以前はあまり目立った活動は見られなかった。しかし日清戦争後の秀吉人気の上昇に合わせるかのように、明治 29 年に規約を改正し、秀吉墳墓再建のための募金活動、豊太閤 300 年祭の本格的な計画を始めた。

明治 30 年に発表された豊国会趣意書では「豊太閤が勤王愛国の志に厚く且つ其功勞者しかりしことは必ずしも夫の區々たる大内修繕の如き又聚楽の第に行幸に際し諸侯伯をして盟はしめし如き又は天皇上皇の共御を奉りたることの如き史乘に明著したる事實は一々之を列挙するを須たす元弘以来の紛争戦亂を一定し国家の秩序を快復して内は名分を明にし外は国威を海外に轟かしたる其功績は赫々として掩ふへからざるものなり」と述べ、さらに豊国山廟の大祭奉告祭の祭文にて、黒田長成は公は不世出の英資を以て戦国干戈の際に生れ南征北伐威武を内外に宣揚し上皇室を護し下群雄を御し常に大義名分を明にし以て皇基を富岳の安きに置きたるは炳然として永く史冊に輝けり」と述べるなど²⁴、豊国会は秀吉の勤王性、海外進出を強調していた。

²⁰ 久保高輔「豊臣秀吉論」(『穎才新誌』764号〈東京印刷会 明治25年〉)

²¹ 日下寛「豊太閤の雄略」(『史学会雑誌』第4号〈史学会 明治23年〉)

²² 「豊臣秀吉の韓国遠征古戦場」(『読売新聞』明治27年6月18日別刷1面)

²³ 大森金五郎「秀吉の外征」(日本歴史地理学会『安土桃山時代史論』〈仁友社 大正四年〉)

²⁴ 『大祭奉告祭』(『風俗画報』第164号〈東陽堂 明治31年〉)

また豊国会は参拝客向けに鉄道、汽船の運賃の2割割引を実施し²⁵、300年祭に合わせて「豊国詣」「花の宴」と2つの唱歌を作成する²⁶など300年祭をより大規模な行事にしようと努力していたことが分かる。同会は創設時に内務省から下賜金、そして明治30年には明治天皇から御下賜金を受けるなど²⁷皇室、政府の支援を受けていた。また、豊国会自身も政府と関わりのある華族²⁸によって運営されていることから、明治政府の秀吉顕彰方針を踏襲し、豊太閤三百年祭などを通して国民に広める目的を持っていたと考えられる。

こうして行われた豊太閤300年祭を通して庶民、特に京都市民には政府の秀吉顕彰方針が広まった。新聞には「君国多事の日「数年の長壽と保ちない東亜の乾坤今如何」の一句わけて感動と与へらるると覚ゆ。この歌の幼き唇より漏れつつ阿弥陀山嶺に唱えられん日豊公の靈如何に地下に微笑さるらん。」と京都市民の間に流行ったとされる唱歌豊太閤²⁹の中に秀吉の海外進出を意味する歌詞があることを賞賛している記事³⁰があることから、明治31年当時、子どもにも秀吉は海外進出の英雄としての認識が少なからず広まっていたと考えられる。

さらに京都市民の盛り上がりも大変なものであった。豊国神社の神宝拝観者も8万2千人を記録しただけでなく、豊公300年祭にあわせて京都博物館にて豊太閤遺物展覧会も開催され、8万6千人が来場した³¹。300年祭では能楽堂で「祭典式の終ると共に、折詰一つと酒瓶一本とを持ちたる参列者群衆集し来りて日々立錫の地なきまでに混み合ひぬ」、そして豊国詣では「市中の人々三々五々思ひ思ひに練り行きて昼夜を分たず新廟の下に詣でければ、太閤壇に於ては夜はかぶり火を焼きて詣ずる人々の便を計りぬ」といった盛況ぶりを見せた³²。また豊国祭の余興として豊国踊りが各所で流行り、京都商工会議所が工場にまでなだれ込み仕事にならないとして自粛を豊国会に申し出る³³ほどの人気になるなど豊太閤300年祭をきっかけに、京都を中心に豊臣秀吉の一大ブームが起きていた。

一方、大阪中之島の豊国神社でも1ヶ月遅れて300年祭が行われたものの、京都のような盛り上がりは見せなかった³⁴。300年祭においても大阪では豊国会委員に大阪城内の立ち入りが許可された程度であったことから³⁵、当時の大阪は豊臣秀吉の街というわけではなかったことが分かる。

しかし明治36年に、日本美術協会大阪支会が第5回博覧会期間中に大阪城址観覧も含む豊太閤遺物展覧会を開催、大阪豊国神社に秀吉銅像が建立され³⁶、また秀吉の出身地である愛知県の中村では県が5千円を支出し、豊太閤公園が設置された³⁷。このように明治時代の豊臣秀吉顕彰は、当時は京都が中心となっていたものの、次第に秀吉ゆかりの地に広まっていったと考えられる。

以上のように、日清戦争を契機として秀吉観が見直され、豊太閤300年祭によって京都を中心に秀吉顕彰は盛り上がりを見せ、全国へ広まっていったのである。

第三節 韓国併合と朝鮮進出の英雄

²⁵ 官設鉄道、関西鉄道、九州鉄道、山陽鉄道、総武鉄道、甲武鉄道、成田鉄道、大阪鉄道、房総鉄道、日本鉄道、奈良鉄道、日本郵船が対象。関西同盟汽船、大阪商船は一割五分引き。（『豊国会』（『風俗画報』第164号〈東陽堂 明治31年〉））

²⁶ 「豊公300年祭を記念して二つの唱歌」（『読売新聞』明治31年3月19日朝刊4面）

²⁷ 「豊国会の御下賜金」（『読売新聞』明治30年8月5日朝刊4面）

²⁸ 会長である黒田長成は貴族院議員、貴族院副議長を務め、副会長の蜂須賀茂韶は貴族院議長、文部大臣を務めていた。

²⁹ 前述の豊国会作成の唱歌とは無関係。内容は以下のようになっている。

³⁰ 「唱歌豊太閤」（『読売新聞』明治31年2月4日朝刊4面）

³¹ 「豊国会遺物観覧人数」（『読売新聞』明治31年6月7日朝刊4面）

³² 「雑録」（『少年世界』第4号11巻〈博文館 明治31年〉）

³³ 「豊国祭の余興の豊国踊り延長の動きに京都工業同盟会が注意を要望」（『読売新聞』明治31年5月6日朝刊4面）

³⁴ 「地方ニュース」（『読売新聞』明治31年5月21日朝刊4面）

³⁵ 「大阪城及び飛雲閣枳殻邸」（『風俗画報』第164号〈東陽堂 明治31年〉）

³⁶ 「よみうり抄」（『読売新聞』明治36年2月21日朝刊5面）

³⁷ 「よみうり抄」（『読売新聞』明治36年2月6日朝刊2面）

本節では前節で明らかにした秀吉顕彰の高まりがどのように国民に浸透していったのかを明らかにする。

明治 36 年には初の検定教科書として『小学日本歴史』が発刊された。この内、朝鮮出兵の項において「諸外国をも、わが朝廷の御威光のもとに従わしめんとし、まづ、朝鮮に案内せしめて、明國を伐たんとせり。」と教科書として初めて明確に秀吉の勤王性が朝鮮出兵と絡めて説かれる一文が登場した³⁸。これにより以前は教科書によって扱いに差があったものの、全国民が勤皇の偉人として秀吉を見ることになった。

同時期に起きた日露戦争では朝鮮出兵時の日本軍の捕虜の扱い、占領政策などを評価し、日露戦争に結びつける論説があるものの、同戦争を報じる新聞、雑誌の中で秀吉に言及するものは少ない。同じ外国との戦いでも言及されることが多かったのは朝鮮出兵ではなくむしろ元寇であった。三国干渉以来ロシアの脅威を元寇に見立て、北条時宗を顕彰する時宗祭が行われ、戦時中には軍歌「元寇」が流行するなど国民は日露戦争に対し、朝鮮出兵より元寇に向いていたことが分かる³⁹。

こうした状況の中、発刊された朝鮮出兵を扱った書籍である『弘安文禄征戦偉績』⁴⁰において秀吉は「国家太平の偉業を建て、余威遠く海外に宣揚するは、之を曠世の英傑と言はざるを得ず」「聚楽の臨幸を請ひ、全国の諸侯伯を御前に会し、皇室奉戴を誓はしめたるが如き、当時在ては、真に回天捧日の盛挙」と勤王、海外進出両方の点から評価されるなど、この時期には明治政府の意図する秀吉観がある程度国民にも浸透していたことが分かる。

日露戦争後、韓国併合が進むにつれて秀吉は「朝鮮進出の英雄」としてさらに注目され、評価されるようになる。明治 40 年の『日本及日本人』誌上では「世の好める及び好まざる史的人物」と題する企画が立てられている。その結果、豊臣秀吉は、好める人物部門で楠木正成を抑え 1 位を獲得している。理由として「君臣の大義を弁じ、群雄を駕御し、終いに明韓征討の挙に及べり。その行為堂々たるの感あり。」「活量吞牛の気宇は少日本たらんとする今日の人には好模範たり。」「微賤に身を起こして風雲に際会し、意の欲する所に任じて栄華を極む。快男子なる哉。」「磊々落落たる気性、臨機応変の才略、国家拡大の大理想、皇室尊崇の念深き故好む」⁴¹と、秀吉個人の魅力から朝鮮出兵の歴史的意義、勤皇性と様々な面から評価されていたことが分かる。

さらに韓国併合時、朝鮮進出の英雄としての秀吉顕彰は最高潮を迎えた。韓国統監であった寺内正毅が韓国併合の際に「小早川 加藤小西が 世にあらば 今宵の月を いかに見るらむ」と詠み、寺内の部下が「太閤を地下より起こし見せばやな 高麗やま高くのぼる日の丸」と返歌したことに代表されるように、当時の人々は朝鮮といえば真っ先に豊臣秀吉の朝鮮出兵を連想したことが分かる。

また雑誌『成功』⁴²において豊太閤特別号が発刊され秀吉の功績が取り上げられた。ここでは「豊太閤は実にわが国が産したる最大の英雄なると共に、韓人をして我が国語を用ゐしめんのみと豪語し、盛んに韓国に向って活動せし偉人なるが故」と発刊の趣旨を述べ、秀吉を「盛んに韓国に向って活動せし偉人」と評している。『成功』には板垣退助や大隈重信、三浦梧楼など著名な政治家も多数寄稿しており、当時の秀吉の注目度合いが窺える。論説では朝鮮出兵、韓国併合を正当化するものが目立つ。例えば、「朝鮮の軍隊は日本軍の心持ちを了解し得なかつたけれども、朝鮮の常民には能く日本軍の心持ちが解つてゐたらしい。従つて日本軍の徳も速かに理解された」と日本軍の規律正しさ、人民統治を評価し、日本軍が朝鮮人を殺したのは、撤退の際に義兵として反抗してきたからと主張する論説⁴³がある。また、秀吉を、ワシントン、ナポレオン、ウェリントンなど世界の英雄と比較し「豊公は那翁よりも遙に偉いと思う。日本に生れたからあれ位の事しかできなかったのだ。欧州に生れては欧州を統一し世

³⁸ 文部省『小学日本歴史』（教育図書合資会社 明治 36 年）

³⁹ 安藤駿佑『近代日本における「元寇」の想起』（『政治学研究』56号（慶應義塾大学法学部 平成 28 年））

⁴⁰ 明治 38 年に史学会によって発行された。元寇と朝鮮出兵を扱っている。

⁴¹ 肝付兼行「余の好める及び好まざる史的人物」（『日本及日本人』471号（政教社 明治 40 年））

⁴² 「自助的人物の養成」を目的に明治 35 年 10 月に成功雑誌社によって発刊された雑誌。

⁴³ 今西龍「韓国人の眼に映ぜし豊太閤」（『成功』第 19 巻第 4 号（成功雑誌社 明治 43 年））

界を統一せんと企てたであらう」と評したり⁴⁴、「日本人の思想は、概ね狭小であったが、一旦豊太閤のやうな大人物が出たので、その遠大な思想や、その壮大な事業に鼓舞激励せられ、知らず識らず卑しむべき島国根性を脱離し、豊太閤のやうな遠大な思想を懐き、雄大な事業を望むやうになったのだ。」と日本が大陸に進出できた理由を秀吉の朝鮮出兵に求める論説⁴⁵も目立つ。一方、林董は『成功』誌上にて、「秀吉のは只だ勝つことが面白いので、大仕掛けなる倭寇見た様な風に、無茶苦茶にあらし廻って来た」と統治の面から秀吉を否定的に評価し⁴⁶、秀吉を反面教師にして戒め、韓国併合を進める日本に高い品格を求める一文も書かれていたことは付言しておきたい。また、征韓論を主張した西郷隆盛との比較も行われ、当時朝鮮に関係する人物といえば秀吉と西郷の二人が注目されていたことがわかる。

韓国併合の時期と並行して「尋常小学日本歴史」が明治42年9月に改定される⁴⁷。「天正一六年京都の聚楽の第に後陽成天皇の行幸を請ひ奉り、諸大名を会して相共に皇室を尊崇し、関白の命令に違はざるべきを誓はしめたり」⁴⁸と秀吉の勤王性が強調され、また、「國威を海外に發揚せんと欲し、國內漸く平定するに及び、先づ明と好を修めんとし、朝鮮をして旨を彼に通ぜしめ、更に琉球をして之を明に告げしめ、又フィリピン台湾へも使を遣はして、其の服従を促せり。」と秀吉の海外進出も強調された。一方、『尋常小学修身書』が明治43年に改定され、修身の教科書に秀吉関連の作品が初めて出現する⁴⁹。同書の中の、「皇室を尊べ」では、戦国時代に困窮していた皇室を秀吉が支えた例から尊皇心を、「志を立てよ」「職務に勉勵せよ」では青年期から織田信長に仕え始めた頃の秀吉を題材に、立身出世を説く作品が掲載されるなど、明治政府の意図する「国家の英雄」「海外進出の英雄」以外にも従来と同じく「立身出世の英雄」としての秀吉も重要視されていたことが分かる。

大正4年、豊臣秀吉に正一位が贈位される⁵⁰。贈位の理由は「海内を統一し群雄を統一し皇室を推戴し、供奉を豊裕にして至尊の依頼する所となる其の証明の師を發して皇国の宣布を大にし明の封冊を絶ち、再征の役を興して帝国の威武を賑わしたるは史乘に炳乎たり」⁵¹とした。これは皇室尊重、海外進出を評価した贈位であり、明治維新以来の秀吉評が完全に固まったと考えられる。

以上のように、日本の朝鮮半島への進出が進むに連れ、秀吉への注目度は格段に高まり、韓国併合で最高潮に達し、明治天皇の豊国神社再興の詔勅にある「国家の英雄」「海外進出の英雄」像は完成された。

第二章 大正、昭和初期の豊臣秀吉観の変遷

本章では明治時代に固まった秀吉観が大正時代にどのような変化を辿り、戦争期の秀吉観につながっていったのか、その過程を明らかにする。具体的には大正時代、大阪における動き、昭和時代初期の3節に分けて考察していく。

第一節 退潮する顕彰

⁴⁴ 三宅米吉「豊太閤の群雄統御法」(『成功』第19巻第4号〈成功雑誌社 明治43年〉)

⁴⁵ 中川健二郎「豊太閤は世界的英雄」(『成功』第19巻第4号〈成功雑誌社 明治43年〉)

⁴⁶ 林董「勝利に趣味を有する豊太閤」(『成功』第19巻第4号〈成功雑誌社 明治43年〉)

⁴⁷ 前掲、滋賀大学附属図書館編著『近代日本の教科書のあゆみ 明治期から現代まで』

⁴⁸ 文部省『尋常小学日本歴史 二巻』(日本書籍株式会社 明治43年)

⁴⁹ 4巻で「皇室を尊べ」「志を立てよ」「職務に勉勵せよ」、5巻で「謝恩」「誠実」「油断するなかれ」が掲載されている。

⁵⁰ 『官報』大正4年11月10日付

⁵¹ 『[功臣略歴] =1』(『読売新聞』大正4年11月12日朝刊3面)

本節では、大正期における秀吉観の変化について明らかにする。

大正時代に入ると第一章で見たような秀吉顕彰の動きは落ち着きを見せていく。理由として大正デモクラシーに代表される自由主義的風潮の出現、マルクス主義の隆盛により唯物史観が広まり秀吉を英雄視する風潮が薄れたことから、明治期のような秀吉顕彰の風潮は言論界では少数派になった。むしろ秀吉を否定的に見るもの、あるいは学術的な歴史研究が大半を占めていくことになった。

代表的なものに徳富蘇峰の『近世日本国民史』と池内宏の『文禄慶長の役』が挙げられる。この2著は後述する日中戦争期の秀吉顕彰の高まりの中、朝鮮出兵が再び注目された際、「容易に手にし得る名著」⁵²として紹介されるほど当時の秀吉論、朝鮮出兵論の基礎となっていた書籍である。この2冊に共通しているのは共に朝鮮出兵を失敗と断定していることである。池内は朝鮮出兵を「竜頭蛇尾に終れる失敗の事業」と論じ、蘇峰は「新たに戦争の局面を海外に拓くことは、秀吉以外の者共に取りては、いづれも迷惑至極であったに相違ない」とし、慶長の役に関しては「秀吉の痲癩紛れの腹癒しに過ぎなかった」と断じていた。このように両著とも朝鮮出兵を失敗と断じた上で、その失敗原因を探る内容になっている。大正時代中頃には明治期の礼賛の風潮は消え去り、朝鮮出兵は失敗であったという見方が大半を占めていたことが分かる。

また、蘇峰は「山崎合戦の門出に姫路城にあった秀吉と、朝鮮の役のために名護屋の大本営に於ける秀吉とは全く別人であった。加藤清正の如きも、世人の想像する程、神様でもなかった。其の他の諸将に至りても、時としては日本人の長所、美点を發揮したが、大体に於ては、朝鮮役は日本国民の頌徳表と云ふよりも、寧ろ弾劾文であると云ふ方が、公平に近いと思ふ程、其の国民性の欠陥が暴露されている。」と述べるなど秀吉個人への批判も強めている。

こうした秀吉観、朝鮮出兵観に代表されるように、戦間期を通して朝鮮出兵は秀吉の失敗と認識され、否定的なイメージを持つことになり、日中戦争に至るまで秀吉顕彰の際には、天下統一など秀吉の内政面の輝かしい功績のみが賞賛されるようになっていた。

一方『近世日本国民史』には秀吉と皇室の関係について「彼の勤王は、専ら打算的ではなかった。彼は王室を假りて、齋桓、晋文の覇業を営まんとする許りではなく、眞成に皇室の御繁栄を謀った」とあるように朝鮮出兵が否定的に論じられる一方、秀吉の勤王については以前と同じように評価している。このことから程度の差こそあれ、秀吉を勤皇の偉人として見ることは明治期より継続され、通説になっていたと考えられる。

また蘇峰は朝鮮出兵を「軍事上よりも、寧ろ外交上に於て、重大の事件である」と評し、『近世日本国民史』において豊臣氏の治世を扱った「豊臣史時代」全7巻のうち3巻を使い朝鮮出兵を論じている。大正期から、雑誌『朝鮮』⁵³を始め、朝鮮出兵に関する戦史研究などが増加しており、日本領になった朝鮮への研究が重要視され、結果として朝鮮出兵を中心として秀吉研究の増加に繋がったと考えられる。

こうした朝鮮研究の隆盛は教科書にも表れた。大正10年に改定された『尋常小学国史』において豊臣秀吉の章が2章立てになり、朝鮮出兵の時期を中心にページ数も大幅に増加した。増加分は主に戦史の詳述に当てられている。また秀吉の親孝行な一面も紹介されるなど、秀吉の人間味を加味した人物像を反映した内容ともなっている。しかし大正時代、昭和初頭を通じてその後の言論界は朝鮮出兵をあまり好意的に見ることがなかったため、その内容も昭和18年の改定まで大幅に変わることはなかった。

このような朝鮮出兵を否定的に捉える見解が、あるいは学術的な基礎に立つ秀吉観が論壇を支配していたことに加え、大正時代のリベラルな言論空間の影響により主流となり、大正時代から昭和初期にかけては、明治期のような

⁵² 京口元吉『秀吉の朝鮮経略』（白揚社 昭和14年）

⁵³ 大正9年に「朝鮮彙報」が改題され、発刊された朝鮮総督府機関紙。

な英雄としての秀吉礼賛の風潮は大分後退していたと言える。こうした風潮を表す特徴的なものに昭和7年の国際連盟総会における松岡洋右の演説がある。中国の顧維鈞が柳条湖事件における日本の軍国主義を主張するために豊臣秀吉の朝鮮出兵を引例したことに對し、松岡洋右は「彼（豊臣秀吉-筆者注）は日本が過去廿六世紀間に於て唯一の軍国主義的政治家であつた」⁵⁴と秀吉の朝鮮出兵の正当性を否定する回答をした。同事件について、『大阪朝日新聞』は「彼は日本が過去廿六世紀間においても日本は唯一人、征服を夢見大陸に遠征軍を送つた日本のナポレオンと称せられる人物を出しただけであつた、しかもこの遠征も西暦一五九八年當然失敗に歸した」⁵⁵と論じていた。『大阪毎日新聞』も「日本は過去廿六世紀の間において征服を夢み大陸に遠征軍を送つた人物をたつた一人しか出してゐないのだ、しかもこの遠征も西暦一五九八年に失敗に歸した」⁵⁶とあるように、いずれも、他国を征服する欲を持ち、それを行動に移した例外として秀吉を位置づけ、日本人の典型ではないことを抗弁していた。また、『東京朝日新聞』にて「朝鮮征伐は朝鮮同胞に失礼であり、朝鮮侵入という言葉に置き換えるべき」という主張⁵⁷が発表されたり、中国の雑誌の転載であるものの朝鮮出兵を「侵略」と表記する雑誌⁵⁸も出現した。いずれも否定的脈絡の中で秀吉が言及されている。

以上のように、韓国併合で最高潮に達した秀吉顕彰は、大正時代に入ると次第に下降線を辿り、秀吉は歴史上の一人物として、あるいは否定的に扱われるようになった。

第二節 大阪における顕彰

前節では大正時代の豊臣秀吉像が否定的に捉えられるようになったことを明らかにしたが、大阪における秀吉像はそうした動きとは一線を画し、大阪市の拡大に伴って独自の変化を遂げていく。本節ではそうした大阪における豊臣秀吉観の変遷について考察する。

大正時代以降、大阪市は合併を繰り返し、拡大を続けていた。こうした大大阪の象徴として豊臣秀吉は注目されていったため、同時代ではあるが前節で明らかにした秀吉像と異なる展開を見せることになる。

大正10年には京都豊国神社の別社であった大阪中之島豊国神社が府社として独立する。元大阪商業会議所会頭土肥道夫ら大阪有志によって「豊公に最も関係の深い大阪が別社で社格のないのは面白くない」⁵⁹として内務省に運動した結果、実現したのである。これは秀吉顕彰における京都と大阪の力関係が変化したことを意味する。

こうした大阪市の拡大の動きが最高潮を迎えたのが大正14年である。大阪市は大正14年東京市を人口で抜き、日本一の市になった。この勢いを背景に大阪毎日新聞の主催、大阪市の後援で大大阪博覧会が開催された。天王寺と大阪城と2箇所に分けて会場が設置され、大阪城天守閣跡には小規模ながら2層建ての大阪城天守閣が設置され、豊公館として秀吉関連の品物の陳列に使用された。

豊公館については「大大阪の基礎を築いた豊公を偲ぶと共に構造を当時の大阪城に模し、五層の天守閣が大阪の一角に毅然として聳えた豊臣時代の偉風を現実に示そうとしたものである。」と評され、大阪城会場の他に天王寺会場大手前門柱に太閤桐があしらわれるなど、前述の明治時代とは違い秀吉を大阪の象徴として見ていたことが分かる。豊公館には160品目にも及ぶ展示物が陳列され、3月15日から4月30日の間の入場者は、天王寺会場で119万人、豊公館で69万8千人と大盛況に終わった。また、後藤新平（子爵）が「大阪の歴史を記念するために

⁵⁴ 「中国よ恐るるなかれ 日本に侵略の野心無し 松岡代表の演説要旨」（『読売新聞』昭和7年11月24日朝刊2面）

⁵⁵ 「支那のでたらめを堂々と追及反駁す」（『大阪朝日新聞』昭和7年11月24日朝刊1面）

⁵⁶ 「顧維鈞の暴論を眞向から痛駁す」（『大阪毎日新聞』昭和7年11月24日朝刊1面）

⁵⁷ 「鉄箒」（『東京朝日新聞』昭和8年11月12日朝刊3面）

⁵⁸ 予覚民「日本の大陸侵略史」（『歴史教育』第5巻第10号 昭和5年）

⁵⁹ 「大阪豊国神社独立」（『大阪毎日新聞』大正10年12月22日朝刊7面）

も、また市民の修養のためにも、大阪城に豊公館の如く豊公築城当時の建築構造をよく研究して、今の位置に常設的に天守閣を建造して、これを博覧会とか展覧会の会場に当ててはどうかと思う」⁶⁰と述べるなど、大阪城天守閣再建に繋がるイベントとなった。

大大阪博覧会以降、大阪における秀吉顕彰の動きは加速していく。昭和3年には秀吉没後330年に当たることから豊太閤博覧会が大阪で開催され、また翌年には中之島の豊国神社を大阪城内に移すべきだという案も主張された。

一方この時期の京都では、浅野長勲を会長とする豊国会が北政所⁶¹の没後300年祭⁶²を実行するなど動きがあったものの、大阪のように秀吉没後330年祭は行われていない。このことから大阪側は明治維新以来京都側に握られていた秀吉顕彰の主導権を奪おうと精力的に活動していたと推測できる。

こうした動きの中、昭和3年、昭和天皇御大典事業として大阪市は大阪城天守閣の再建を企画する。この事業は建設費を全て市民からの寄付で賄うなど全市民的行事とされ、大阪毎日新聞が社説で天守閣再建を支持する⁶³など官民を問わず大阪中を巻き込み大きな盛り上がりを見せた。

大阪城天守閣再建に携わった関係者も豊臣秀吉の大阪城を自らの手で再建することに誇りを感じていた。天守閣工事を担当した大林組は「昭和の聖代における建築技工の雄大を想はしむべきこの事業に対し、社員一同勇奮拚躍、熱心に従事した」⁶⁴とある。また鯨を寄付した鋳造家の今村久兵衛は完成までに延べ人員900人、3000円を費やし、完成した鯨の納入式には250人もの武者行列を仕立て搬入した⁶⁵。このことから大阪城天守閣再建は単なる御大典事業ではなく、大阪市民による大阪市民のための事業だったことが分かる。

大阪城天守閣完成の記念式典は「大阪全市民が聖代を仰ぎ、そして豊公の偉業を偲びたいと思っている」として市民祭として行われ、竣工式には城内に入れないにも関わらず5万人もの群衆が集まり、「この夜天守閣は前夜に引きつづいて大煙明皎々と金鯨、伏虎、大破風を城壁上に鮮やかに浮彫りにし、大手前公園一帯は大緑門も市電休憩所も、街路樹の木立も大電燭に昼を欺くばかり、お濠の水の色さへ明るむばかりの華やかさ、夕かけるころから暗に描く不夜の名城の雄姿と装飾電車オンパレードと大提灯行列を見んものと西から東から南から北から押し寄せた大群衆は忽ちのうちに、大手前の広場を埋めつくして街路樹と柵と濠を囲んで人影の黒で描き出した大アラベスクの凄まじさ！」と報じられるほどの盛り上がりを見せた⁶⁶。また、当時第4師団長だった阿部信行は祝辞にて「惟ふに豊公地を此処に卜して城を築くや単に兵用の利と商工の便とのみならず又実に海外雄飛の大競輪を念とせしに他ならず。若し豊公に藉すに念を以てせば、彼曠達なる豊公精神の発露は更に四海を風靡して幾百年前我海外発展の途己に拓かれ大阪の発展は蓋し今日を俟つを要せざりしならん」と秀吉の海外進出を賞賛していた⁶⁷。

天守閣再建後も、昭和6年11月には太閤さん人形展⁶⁸、昭和7年1月には名瓢展覧会⁶⁹など毎年のように大阪では秀吉関連イベントが開催され、注目を集めていた。特に昭和9年の大阪商工祭では豊公武者行列150名、市青年団奉仕田楽行列30名、女儀行列100名が大阪豊国神社を経て大阪城まで向かう行列が実施されるなど、大阪の象徴として秀吉は扱われていた⁷⁰。

また、この時期の大阪における秀吉顕彰の活動家に、美術日報社長で太閤会を組織した藤井石道がいた。藤井は

⁶⁰ 大阪毎日新聞社『大大阪記念博覧会誌』（大阪毎日新聞社 大正14年）

⁶¹ 秀吉の正室ねね。寛永元年（1624年）没。

⁶² 「豊国祭と貞照神社鎮座」（『大阪毎日新聞』大正14年11月19日朝刊2面）

⁶³ 「大阪城の開放」（『大阪毎日新聞』昭和3年6月29日朝刊2面）

⁶⁴ 恒次寿「大阪城物語」（国勢協会 昭和6年）

⁶⁵ 同上。

⁶⁶ 「天守閣竣工式」（『大大阪』第7巻第12号〈大阪都市協会 昭和6年〉）

⁶⁷ 「輝く天守閣の復興と大阪城の公園化」（『大大阪』第7巻第12号〈大阪都市協会 昭和6年〉）

⁶⁸ 「豊太閤一代記（広告）」（『大阪朝日新聞』昭和6年11月5日朝刊15面）

⁶⁹ 「名瓢展覧会」（『大阪朝日新聞』昭和6年12月27日朝刊5面）

⁷⁰ 「大阪市政ニュース」（『大大阪』第11巻第11号〈大阪都市協会 昭和9年〉）

「豊公を顕彰して其の大精神を現代青年の心胆に注入すべく」⁷¹として豊公記念館及び豊公園の建設を主張した。藤井は豊公記念館をフランスのパンテオンのような存在にすることを目指しており、そのための手段として『太閤絵巻』を出版し、芸術面から秀吉顕彰を進めようとしていた。秀吉の顕彰施設として大阪城天守閣再建されたことにより、藤井の計画する豊公記念館は必要性を失ってしまい結果として実現しなかった。しかし、この企画からも大阪を中心に新しい秀吉顕彰の動きが複数出てきていたことが分かる。

昭和11年には豊公生誕400年祭が名古屋の中村で行われた際に、大阪市では生誕の地ではないため生誕祭は見送りながらも、美術品を集めた桃山展を開くなどして⁷²、秀吉に関係あるイベントは全て行おうという意図を示していた。こうした活動は京都では見られず、秀吉顕彰の主導権は完全に大阪に移っていったと考えられる。

以上のように、大阪では大阪城天守閣再建を中心に、秀吉顕彰が大きな盛り上がりを見せた。しかしそこには明治期のような「国家の英雄」「海外進出の英雄」像はほとんど見られなかった。大阪の街に秀吉の象徴である天守閣が再建されたことにより、大阪は秀吉の街としてより一層勢いを増していったのである。

第三節 英雄待望をめぐる顕彰

昭和に入ると秀吉は英雄待望の風潮のもと、再び注目されることとなった。本節では、この点に注目して考察を加える。この時期はムッソリーニのファシスト党が勢力を拡大していた時期であり、それまでのマルクス主義唯物史観の下、日の目を見なかった英雄という人間的存在が国家社会主義の風潮の表れとともに再び注目されるようになった。こうした中、秀吉は再び英雄として注目されるようになる。50万部を超えるベストセラーとなった鶴見祐輔の『英雄待望論』はその代表である。この書籍は昭和3年に発刊され、秀吉はカエサル、ナポレオンとともに天下統一の英雄として紹介されている。同時期に『日本及日本人』誌上にて歴史上の偉人から構成する「理想の内閣」という特集の中でも豊臣秀吉は内閣総理大臣とされるなど⁷³、秀吉は昭和初頭から再び天下統一の英雄として見られるようになった。

その後、ヒトラーを中心にナチズムがさらに躍進するに従って、秀吉もより注目されるようになる。この時期は大正時代から続く戦史研究もより盛んになり、秀吉はより一層注目を集める歴史上の人物になっていた。

例えば『歴史公論』では昭和11年10月に豊臣秀吉特集号が発刊され、編集後記では「唯物史観で英雄の価値下落した近世の世界観に於て英雄は真に不景気な存在であった。ただし軌近のファッショ台頭マルキシズムの劣勢とともに、英雄待望の気風は世界的傾向となった。吾人は本号太閤特集により、現代人に欠けている英雄の気魄を幾分でも吹き込みたい」と、マルクス主義の退潮に代わり生じたファシズムの風潮に合わせた現象と明言されるまでになっていった。

その一方で、『歴史公論』では秀吉の勤皇を論ずる文は数多くあるものの、朝鮮出兵については時局と共鳴するような解釈は見られず、失敗と断定するような論説が依然として存在した。大正から昭和初頭にかけての秀吉観が継続していたと見做すことができる。しかし櫻井忠温（陸軍少将）は、このような中でも、「秀吉の海外雄飛は、ナポレオンに比すべき快挙だった。」と朝鮮出兵を評価している⁷⁴。また井上一次（陸軍中将）は、秀吉が外交によって次々と諸侯を従えていったことを「『戦わずして勝つ』の手段を講じ、極めて有効なる結果を収めた」と評価し、「現今の世界は民族競争の時代であって、或種の戦国時代と講ずるも妨げない。我が国は満州事変以来武力に於て世界を恐怖せしめ得たけれども、遺憾ながら、他方世界の信頼を減じたことを否むことができぬ。勿論、時代

⁷¹ 太閤会『太閤絵巻』（太閤会出版部 昭和12年）

⁷² 「絢爛 桃山展開く」（『大阪朝日新聞』昭和10年10月15日朝刊13面）

⁷³ 「雲間寸観」（『日本及日本人』第154号（政教社 昭和3年））

⁷⁴ 櫻井忠温「家康に対する臆病は残念」（『歴史公論』第5巻 第9号（雄山閣 昭和11年））

は異なっている、又躍進日本として些々たる現象は之を顧みるに遵がないかもしれぬが、秀吉のなしたる行蹟が、吾人にも大なる教訓を與へたることは予の信じて疑はぬところである。」と、外交によって天下統一を果たした秀吉を評価しつつ、満州事変以降、軍事力によって勢力を拡大しようとし、世界の批判を受けている日本を暗に批判していた⁷⁵。また、斎藤隆夫は「今日我が国の意気地なき政治家等に秀吉の爪の垢でも煎じて飲ませたくなる。」⁷⁶と述べるなど、同時代の時局の推移を批判する際に、その反面教師として秀吉に言及されていたことが分かる。

このようにナチスドイツのラインラント進駐などヨーロッパにおけるファシズム勢力の台頭、日本の不況、政情不安定から再び歴史上の英雄として秀吉が注目され始めたのである。

第三章 戦時中の豊臣秀吉像の変容

本章では大東亜戦争期に秀吉顕彰がどのように変化したかを、日中戦争以前、日中戦争期、大東亜戦争期の3つの時期に分けて考察する。

第一節 勤王の英雄として

本節では、前述した昭和に入り生じた秀吉顕彰の隆盛のさなか発表された『国体の本義』発表以降の秀吉顕彰の変化について明らかにする。

昭和以降注目され始めた秀吉が、国家によって再び取り上げられたのが『国体の本義』である。昭和12年3月に発表された『国体の本義』の第一章「大日本国体」第三節「臣節」の中で、秀吉は登場し、「戦国時代に於ける皇室の式微は、真に畏れ多い極みであるが、併しこの時代に於ても、なほ英雄が事を為すに当っては、その尊皇の精神の認められない限り、人心を得ることは出来なかつた。織田信長、豊臣秀吉等がよく事項を奏するを得たことは、この間の消息を物語っている。即ち如何なる場合にも、尊皇の精神は国民を動かす最も力強いものである。」と尊皇精神があればこそ人心を得ることができ、事を為すことができると説明していた。このことから国体の本義は昭和に入り再び注目され始めた秀吉の論じ方を規定する役割を果たしたと考えられる。

この『国体の本義』発表後、秀吉は再び明治期のような「勤皇の英雄」として扱われるようになり、従前のような秀吉を批判、否定する論説は消えていった。そして『国体の本義』の内容に沿った論説が多数出現するようになり⁷⁷、それは、国民精神総動員運動によって一層高まることとなる。

こうした秀吉顕彰の動きは軍にも積極的に現れた。昭和12年7月に松井石根（陸軍大将）が発起人となり、木下利熙（旧日出藩主、子爵）などを委員に、林銑十郎（陸軍大将、前首相）など陸軍軍人が賛同し豊公会が設立された。同会は設立趣旨として「豊臣秀吉が大の勤皇家であり、その豪放闊達な進取の意気、海外雄飛の志などは実に後世讃へるにたるものありとして豊太閤の真面目を齎る世に現はし銅像および豊公会館の建設、伝記編纂、豊公主主義の顕揚などを行はんとするもの」⁷⁸と述べていた。同会は8月18日に発足式が行われる予定であったが、日中戦争に松井が招集されたため立ち消えになり、活動の実態は見られない。しかし同会は秀吉の勤皇精神とともに、海外雄飛の精神にも触れており、前述した昭和6年の大阪城天守閣再建の式辞における阿部信行の発言、『歴史公論』における櫻井忠温の発言などから、陸軍は秀吉を海外、特に大陸進出の英雄として顕彰することに熱心であっ

⁷⁵ 井上一次「秀吉の外交的手腕」（『歴史公論』第5巻第9号〈雄山閣 昭和11年〉）

⁷⁶ 斎藤隆夫「へボ政治家に爪の垢でも」（『歴史公論』第5巻第9号〈雄山閣 昭和11年〉）

⁷⁷ 「豊太閤大明征伐と支那事変の精神」（『中外日報』昭和12年9月19日）など。

⁷⁸ 「秀頼の“薩摩落ち”は実子国松の間違ひ」（『大阪朝日新聞』昭和12年7月5日）

たと考えられる。

このように大陸進出を進める時局に秀吉を関連付けて秀吉顕彰を行おうとする端緒が見えるが、それが本格化するのには日中戦争以降のことであり、それを次節において検証してみたい。

第二節 大陸進出の英雄として

本節では、日中戦争勃発後の秀吉顕彰の変化について明らかにする。

昭和12年7月の日中戦争勃発後、秀吉は「大陸進出の英雄」としての側面が強調されるようになる。しかし日中戦争開始直後から大陸進出の英雄として顕彰されたわけではない。秀吉は『国体の本義』発表後、勤皇の偉人として顕彰されるようになったが、大陸進出の英雄、海外進出の英雄として顕彰され始めるのは昭和13年後半からであった。理由として、日中戦争の長期化が挙げられる。既述のように、大正から昭和初頭にかけて、秀吉の朝鮮出兵はあまり言及されず、言及されても否定的に解釈されてきた。しかし日中戦争開戦から1年間が経過し、それが長期戦の模様を呈してきたことにより戦争を盛り上げる為に大陸進出の英雄として豊臣秀吉の朝鮮出兵が注目されたと考えられる。

こうした秀吉顕彰の動きは『読売新聞』によって更に加速する。『読売新聞』は昭和14年になると『国体の本義』発表以降再び高まった秀吉顕彰の動きに合わせるように、秀吉関連イベントを次々に開催した。これは関東では初の大規模な秀吉顕彰イベントであった。こうした『読売新聞』の動きによって、明治時代以来関西を中心に進んでいた秀吉顕彰の動きが関東でも見られるようになった。

その中でも最も規模の大きかったのが昭和14年2月25日より東京で開催された「大陸進出の英雄豊太閤展覧会」である。「国を挙げて興亜の大業に邁進している時、400年前すでに支那を撃つ前提として朝鮮に兵を進めた豊臣秀吉の偉業が思い起こされる。」と朝鮮出兵の目的が支那を討つことにあったことが強調されつつ、大陸雄飛を実行に移した点に注目し、秀吉を取り上げ、大陸進出の英雄として祀り上げられていたことが分かる。これは『東京朝日新聞』にも広告⁷⁹が出るなど新聞社のイベントの範囲を超えて、関東最大の秀吉イベントとなった。

また『豊太閤菊花大会』も紙面上で大きく宣伝された。これは多摩川園という遊園地で秀吉関連のジオラマなどを展示したものであり、「家族連れ待つ新名所」として数度に渡り紙面上で特集された。『読売』は一家揃って来場することを推奨しており、歴史上の人物としてあまり関心を持たなかった層にも秀吉を浸透させようとしていたことが伺われる。こうした読売の動きによって関西を中心に広まっていた秀吉顕彰の動きは関東にも広まっていったと考えられる。

こうした『読売新聞』の秀吉顕彰の動きは上記のようなイベントに留まらなかった。「大陸進出の英雄豊太閤展覧会」と同時期に紙面上で「豊太閤を語る座談会」も企画されている。徳富蘇峰を中心に吉川英治、渡辺世祐、伊藤政之助（陸軍少将）など著名な作家、研究者、軍人など様々な顔ぶれが座談会を行った。同座談会は「英雄待望時代の現下にわが国民が挙つて崇敬して措かない我國不世出の大英傑」と秀吉を評し、「『太閤』の大陸政策が目下の我国の採つて居る國策に一脈相通ずるやうにも感得せられます」と秀吉を時局と絡めて論ずることを前提として行われた⁸⁰。座談会では白柳秀湖が、現代の困難な時局に対して、「日本も今は太閤のやうな人物が現はれて盛時の事も、経済の事も外交のことも国防のことも、一人で背負つて起つてくれるのでなければ駄目だと思ひます。」⁸¹と秀吉のような救世の指導者の登場を期待し、また、朝鮮出兵を「一種の民族運動」として、「自分の知つて居る地理的の範囲はみな自分の勢力下に置いて見せるといふ雄大なる腹を持つて居つたやうであります。」と秀吉の計画の

⁷⁹ 「白木屋「大陸進出の英雄 豊太閤展覧会」(『東京朝日新聞』昭和14年2月26日朝刊6面)

⁸⁰ 「太閤を語る(1) 秀吉は日本共有の人物 先づ蘇峰氏の第一声」(『読売新聞』昭和14年2月12日夕刊2面)

⁸¹ 「太閤を語る(6) 太閤を待望す 大成への新手法」(『読売新聞』昭和14年2月19日夕刊2面)

雄大さを賞賛しつつ、「常に外国をして朝廷へ貢をしろといふことをいつでもいつて居ります、その点は太閤が自分に名誉を得るとかどうとかいふのでなく全く国威の宣揚にあります」⁸²と朝鮮出兵は私欲によるものではないことを強調している。また、渡辺世祐は秀吉が朝廷を重んじた政治を行っていたことを「君臣和楽の状態」として「本当の日本国民」と評しているように⁸³、昭和以来の英雄待望、勤王が強調された発言の目立つ内容となっていた。

さらに象徴的なのが、吉川英治による『太閤記』⁸⁴の連載が始まったことである。連載開催の趣旨は「日中戦争を契機として、日本が大陸経営の聖業に就かんとする折柄、英雄秀吉を偲ぶや切なる物がある。下賤より身を起こして天下に号令し、さらに明をも皇威の下に置こうとした秀吉は日本が産んだ最大の偉傑である。その偉大な業績は万人の信仰するところ。英雄渴望時代に読者に送って時局化に処する文芸の意義発揚を期する。」と英雄待望と海外進出の点から秀吉を取り上げることが説明されている。連載に関しては吉川英治が一反洪ったものの、読売側の再三の要請により連載に至った⁸⁵ことから、読売の秀吉顕彰の強い意向が看取できる。内容も、秀吉が幼少時から大陸に興味をもっていたこと、御所の普請など秀吉を始めとした各武将の勤王のエピソードを随所に盛り込むなど、時局を反映したものになっており、終戦まで連載が続いた。吉川の『太閤記』は歌舞伎座でも上演され「圧倒的の大人気を呼び、団体の申込みは早くも20日ごろまでの申込みがあるといふやうな有様」⁸⁶と報じられる人気となり、また昭和14年から15年にかけて小学生が無料招待されるなど⁸⁷、戦争期間を通して秀吉に興味を持たせる役割を果たしていた。

一方、大阪でも秀吉顕彰の動きは戦時色を帯びたものになっていく。大阪におけるこの時期の秀吉顕彰の中心団体として前出とは異なる豊公会が立ち上げられる。この豊公会は寿屋⁸⁸社長の鳥井信治郎が中心となって組織した財団法人であり、「明治天皇の豊公祭祀の御沙汰書を奉戴して、興亜の神霊として生ける豊太閤に、大東亜建設の大業の完遂を熱祷し、豊公の遺徳を顕彰して、一層鄭重に奉祀せんことを期する」⁸⁹と設立趣旨を述べ、秀吉顕彰行事の開催、書籍出版に携わった団体である。

豊公会の活動は昭和14年から活発化する。同会理事となった鳥井は昭和14年の6月から7月ににかけて『大阪毎日新聞』紙上で「豊公と大阪城」と題した連載を行い、大阪城を「豊公の大意志は西の方大陸への発展、太平洋及印度洋への進出にあったのであるから、その大意志を表現した大阪城天守閣の毅然たる姿は、全く興亜の雄図を具体的に発現せるもの」⁹⁰と秀吉の海外雄飛は、朝鮮半島、ひいては大陸、さらにはインドにまで広がっていたことが強調されている。さらに鳥井は既述のように、大阪城天守閣が再建された当時は、満州事変勃発時であり、秀吉の朝鮮出兵は未だ否定的に捉えられていたため、これに日本軍の大陸進出を重ね合わせて論じることはなされなかった。しかし、豊公会発足当時になると鳥井は次のように解釈するようになる。すなわち、「大坂城天守閣が1931年に竣工した半年後、満州事変が起こり、上海事変などを次々と起こした。勤王の偉人である豊太閤の慰霊が昭和の時代に強く働きかけ興亜日本の使命の達成を導く神力として再来した結果が大坂城再建である。秀吉の大陸進出、太平洋進出は八紘一宇の精神を継承した歴代天皇の意志を奉戴したもので、神功皇后の三韓征伐以来歴代天皇が抱懐した国威発揚の強い神霊の力が豊太閤に憑依し、このような大業をさせた」⁹¹と再建された大阪城、ひ

⁸² 「太閤を語る (18) 秀吉と大陸政策 亜細亜を呑む雄志」(『読売新聞』昭和14年3月9日夕刊2面)

⁸³ 「太閤を語る (7) 皇室中心主義と君臣和楽のすがた」(『読売新聞』昭和14年3月8日夕刊2面)

⁸⁴ 昭和14年1月1日から昭和20年8月23日まで読売新聞にて連載された。

⁸⁵ 「吉川英治巨編執筆 太閤記三部作 元旦より3か年間連載」(社告)(『読売新聞』昭和13年11月5日朝刊1面)

⁸⁶ 「更に2500名 “太閤劇”に招待 京橋区内の小学生5、6年生を」(『読売新聞』昭和15年6月5日夕刊2面)

⁸⁷ 「“太閤劇”に3000名招待 菊五郎が京橋の6年生を」(『読売新聞』昭和14年12月9日夕刊3面) 「更に2500名 “太閤劇”に招待 京橋区内の小学生5、6年生を」(『読売新聞』昭和15年6月5日夕刊2面)

⁸⁸ 現サントリーホールディングス株式会社。

⁸⁹ 「マニラ陥落 豊太閤奉告祭」(豊公会 昭和17年)

⁹⁰ 鳥井寿山人「豊公と天守閣①」(『大阪毎日新聞』昭和14年6月27日朝刊2面)

⁹¹ 鳥井寿山人「豊公と天守閣②」(『大阪毎日新聞』昭和14年6月28日朝刊2面)

いては秀吉と満州事変以降の時局を結びつけ解説しようとしていた。再建当時は拡大を続ける大阪市が世界都市になることを願って、大阪城は単に「海外発展の象徴」と評されてきたが⁹²、戦争の時代になると大陸、南方進出を目指した豊臣秀吉の居城としての「海外発展の象徴」とされるようになった。このように関西では大正時代からの独自の秀吉顕彰と結びつき、新しい顕彰が生まれることになる。

この豊公会の考えを最もよく表しているのが昭和14年に同会が発行した『生ける豊太閤』である。「国威を海外に発揚して皇威を八紘に及ぼさん為に心血を注いで築いた城～豊公の興亜の雄図を具体的に発現することができる」「大阪市民が天守閣の再建を望んだのは、全く昭和の聖世における豊太閤の再生、再来を望んだからに他ならぬ」と大阪城再建の意義を時局に合わせ述べ、「豊公は終始勤王の偉人であり、至誠奉公の念より、内、国内を統一して当時の帝都を護る」と勤皇に大陸雄飛が加わり、過大に秀吉を評価し、明治天皇の詔勅に沿いながらも「皇威」や「八紘」「興亜」などの語を交えながら、新たな解釈を加えた内容となっていた。

また、昭和15年の皇紀2600年祭に絡んでも、当然の如く秀吉は取り上げられている。例えば、昭和15年4月に大阪市主催、文部省後援で「二六〇〇年歴史展覧会」が天王寺、大坂城天守閣で開催される。²²あるブースの内、秀吉関連は、秀吉自身の生涯、朝鮮出兵、秀吉の武将、安土桃山時代の文化と4つを占めるなど戦時中になっても大阪では変わらず注目されていた⁹³。

以上のように、日中戦争の長期化に伴い、秀吉は「大陸進出の英雄」として再び注目されるようになった。こうした動きは新聞社や豊公会によって益々盛り上がりを見せることとなったのである。

第三節 南方進出の英雄として

これまで見てきた戦時下の秀吉顕彰の動きは、昭和16年12月の日米開戦以降、南方進出の英雄という新しい一面を見せるようになる。日本は開戦以降、東南アジア、太平洋、そしてフィリピンへと進出していった。その過程において、秀吉は天正20年(1592年)当時スペインの植民地であったマニラの総督に対し服属要求を求める使者を送っていたことから、大東亜共栄圏を標榜していた時局に合わせて「南方進出、大東亜建設の先駆け」として顕彰されるようになったのである。また日本がフィリピンを占領した年がこの出来事から350年目の節目の年に当たることも強調され、日本軍がフィリピンに進行した際には各紙とも秀吉のフィリピンへの降伏勧告を記事にしている。例えば「既に古く我が国の今日あるを思つて凶南の志深く印度に書を送り、フィリピンに降伏を勧告して大東亜永遠の平和を確保せんとした」⁹⁴と秀吉がマニラへ書簡を送ったことを取り上げ、彼が大東亜の平和を祈念する考えを持っていたと解説されているように、大東亜戦争開戦後のフィリピン戦において秀吉は最も注目され、言及されることになる。シンガポール攻略戦においても秀吉の水攻めが例に挙げられていたが⁹⁵、フィリピンに比べれば注目度は低かった。

また前節で紹介した豊公会もこうした時局に合わせた活動を行っている。同会は昭和17年1月に中部軍司令部、大阪師団司令部、大阪警備府司令部、大阪府、大阪市、大阪商工会議所、在阪新聞通信9社と協賛し、「マニラ陥落豊太閤奉告祭」を行った。この奉告祭は在阪学生を中心に2万5千人を集め盛大に行われており、軍官民一体となって秀吉を顕彰していたことが分かる。

また豊公会は新聞社のイベントにも協賛している。昭和17年5月に大阪市と『大阪毎日新聞』主催で「大東亜への回想豊公大展覧会」と題する展覧会が開催された。同社は「三百五十餘年前、豊太閤秀吉によつて発揚された

⁹² 前掲、恒次寿「大阪城物語」

⁹³ 大阪毎日新聞社『二千六百年歴史展覧会目録』(大阪毎日新聞社 昭和15年)

⁹⁴ 「凶南完遂豊太閤に奉告 七卿八十年法要」(『中外日報』昭和17年5月10日朝刊3面)

⁹⁵ 「太閤様なら水攻め シンガポール眼前に部隊長の閑話」(『読売新聞』昭和17年2月4日夕刊2面)

尊皇精神、和敬の観念、ことに神彩奔放にして、しかも用意周到なるその海外発展の鴻圖は、いま戦ひつゝあるわが皇軍の作戦と理念とに符合すが如く相似し、その脈々として傳承し發展して渴きざる大和民族の卓越せるその性格は後昆の景仰惜く能はざる所である」と秀吉と時局を結びつけている⁹⁶。同会は中部軍司令部、大阪師団司令部の後援を受けており、中部軍司令官、参謀も来館している⁹⁷。また、豊公展の趣旨徹底のため豊公会後援で豊公賛仰講演会を開催した。同会では魚住惣五郎（大阪府女子専門学校教授）が「豊公と時代精神の展開」と題し、「豊公は小乗的下克上の気質を一掃、純日本的なものを維持して皇室を中心とする澁刺たる時代精神を展開して国威遠く異域に輝かした」と述べ、また、中野某（中部軍高級参謀）は「豊公の外征は、侵略を目的とするものではなく八紘一字の日本精神を大東亜に実現するものでわれらはこの偉大なる豊公精神に應へ、大業を●●し奉らねばならぬ」と、秀吉の業績を豊公精神と題し、他国を征服する目的はない「八紘一字」の精神を掲げながら戦争完遂を説くなど、秀吉顕彰と大東亜戦争を直結させる講演内容であった⁹⁸。以上のように、戦時中の秀吉関連イベントは、秀吉と戦争を結びつけることに力を入れていたことが分かる。

同時期には豊国神社宮司吉田貞治を中心とした宗教界の活動も見て取れる。吉田貞治を中心とした京都豊国神社は「豊太閤の大アジア政策の雄図を偲び、聖戦下に動向の神徳を弥々宣揚すべく」として、戦争下で秀吉顕彰を徹底するため社寺に呼びかけを行い、また大阪、滋賀、愛知の豊国神社に呼びかけ大政所⁹⁹350年祭の準備に取り掛かるなどの活動を行っていた¹⁰⁰。

また、吉田貞治らは『中外日報』¹⁰¹紙上を舞台に宗教界の立場から独自の秀吉顕彰論を展開していった。吉田は「興亜の先驅者豊太閤の神霊を呂宋のその他の地に昭南の神、南海鎮護の神として1日も早く鎮祭されんことを冀うて止まぬ」と、秀吉をマニラに祀ることを『中外日報』紙上で度々主張していた¹⁰²。また、秀吉が南方進出の先駆け、ひいては世界統一の、地球全体の指導者として顕彰されるに従い、大東亜共栄圏建設の肯定のために、朝鮮出兵の大義を説く一文も目立つようになる¹⁰³。

さらに吉田は『中外日報』紙上で対談を頻繁に実施しており、当時の秀吉顕彰の第一人者となっていた。その対談の中で、「もし現代に秀吉がいたら」という質問に対して、吉田は「大東亜細亞どころでない世界統一、地球全体に対する計画を持たれていたであろう」と大言壮語していた。しかし、この吉田発言に対しては、平安神宮寺田密次郎宮司が「武人としては中央に於て皇室に対し奉る忠誠の年それが戦国の武将をして偉大ならしめた大きな原因」として、「天皇様の大御稜威の下に活躍するわけですから、容易に活動できないのではないかと」と吉田の発言を戒めていた。このことから「英雄」として無限の可能性を秘めた秀吉と、「英雄」であっても天皇以上に活躍するのは許されない一臣下としての秀吉が並立していたことが分かる¹⁰⁴。

こうした秀吉顕彰の高まりは教科書にも反映された。『初等科国史』（国民科国史）は、昭和18年3月に大規模な改定が行われた。それまでの改定は既存の内容に追加する方式を取っていたが、昭和18年の改定では内容が一掃され、秀吉の勤王と海外進出を中心としたものに書き換えられている。特徴として、「朝鮮、支那はもちろん、

⁹⁶ 「大東亜への回想豊公大展览会図録」（毎日新聞社 昭和18年）

⁹⁷ 「賑わう「豊公展」 中軍司令官も来場」（『大阪毎日新聞』昭和17年5月16日朝刊4面）

⁹⁸ 「南進の先覚者・豊公を説く」（『大阪毎日新聞』昭和17年5月13日）

⁹⁹ 秀吉の母なか。天正20年（1592年）没。

¹⁰⁰ 「各豊国神社神職が神徳宣揚協力を誓ふ 一二日京都豊国神社で」（『中外日報』昭和12年6月10日朝刊3面）

¹⁰¹ 明治30年に京都で創刊された宗教専門紙。

¹⁰² 「南方鎮護の神として呂宋その他に鎮祭せよ」（『中外日報』昭和17年3月4日朝刊3面）

¹⁰³ 「謬られた豊太閤 本来征伐の意志なし」（『中外日報』1942年11月3日朝刊2面）

¹⁰⁴ この他にも安土桃山時代を「皇室の式微の極みにあつた後を受けて、皇室の有り難さ、日本人の帰一する所をはっきり示したのだから、明治維新の先驅をなす」と評価していた。（「大東亜建設と織・豊両公語る（8）」『中外日報』昭和17年6月17日朝刊3面）

フィリピンやインドまでも従えて、日本を中心とする大東亜を建設しようという大きな望み」とあるように朝鮮出兵の目的を時局と直結させた「大東亜建設」と明記したことが挙げられる。また、朝鮮出兵を「御稜威のもとに大東亜を鎮めようとした」と表現し、天皇の名の下に出兵を行ったことを明記し、秀吉の勤王を強調していることも特徴として挙げられる。また、「家康によって豊臣家はむざんにも滅ぼされてしまった」「秀吉の華やかなやり方に比べると家康は地味だった」とそれまでの教科書では見られなかった豊臣びいきを全面に出した内容となっている。以上のように『初等科国史』の内容は大東亜戦争開始直後の秀吉に関する論説と共通点が見え、戦争初期の論調の影響を強く受けていると考えられる。しかし実際に発行された昭和 18 年は後述するように日本軍の劣勢が目立ち始める時期であった。

したがってこうした秀吉顕彰の高まりも昭和 17 年後半以降日本が劣勢になるに従って勢いをなくしていく。昭和 18 年以降、新聞上では秀吉の登場回数が極端に減るようになる。新聞では「贅沢で知られた秀吉でさえ千利休のありあわせの飯に舌鼓をうった」¹⁰⁵などと儉約を奨励するために登場する程度となる。防戦一方となった戦局において進撃の象徴である秀吉はそぐわなくなった、朝鮮出兵の失敗を想起させる秀吉を使いづらくなったなどの理由も考えられる。

こうした中、『歴史日本』昭和 18 年 4 月号にて豊太閤特集号が発刊される。掲載された投稿は、秀吉の勤皇、軍事経済政策を時局に当てはめる内容が数多くあるものの、朝鮮出兵に触れる論稿は貿易の観点から軽く触れたものがあるのみで全く見られない。朝鮮出兵は失敗に終わったため、敗北で撤退を余儀なくされつつある日本軍と重ね合わせることを嫌い、取り上げる場合は専ら、統治に優れた、天下統一を成し遂げた英雄としてであった。このことから当時の日本では朝鮮出兵は扱いづらい事項になっていたと考えられる。

因みに、日本軍が劣勢になるにつれ取り上げられるようになった歴史事項は元寇であった。元寇は本土決戦に望む国民に希望をもたらす存在になった一方、朝鮮出兵は敗戦を連想させるものとして忌避された結果であると言える¹⁰⁶。

その後、秀吉に関する記事はほとんど姿を消したものの、昭和 20 年のフィリピン戦に際し、豊国神社では「祭神の神霊天翔り国翔り比島の島々に山野に決死の奮戦を続ける皇軍将士の上に神護を熱禱する」¹⁰⁷として豊公会協賛のもと、比島滅敵祈願祭を執り行っている。このことから表面上には出ないものの、劣勢下でも秀吉の「南方進出の英雄」イメージは完全には消えず、少なからず残っていたことが分かる。

以上のように、大東亜戦争以降の日本軍の南方進出に伴い、秀吉は「南方進出の英雄」として顕彰され、日中戦争以来の秀吉顕彰の盛り上がりは最高潮に達した。しかし日本軍が劣勢になるにつれ秀吉は扱いづらい存在となり、終戦間近になるとほとんど注目されなくなったのである。

おわりに

本論文では近代以降、豊臣秀吉がどのように描かれていたのか、時代が移り変わる中で、それはどのように変化したのかを明らかにした。

豊臣秀吉は大阪夏の陣で豊臣家が滅亡した後、長らく日の目を見なかったが、明治天皇の詔勅によって「国家の英雄」「海外進出の英雄」として公に復活した。その後しばらくは明治政府の顕彰方針は浸透しなかったものの、

¹⁰⁵ 「陣影」（『読売新聞』昭和 19 年 6 月 20 日朝刊 2 面）

¹⁰⁶ 前掲、安藤駿佑「近代日本における元寇の想起」

¹⁰⁷ 「豊太閤の雄図偲び比島滅敵の熱禱続く」（『中外日報』昭和 20 年 3 月 16 日朝刊 2 面）

豊国会による豊太閤 300 年祭をきっかけに国民に広まり、韓国併合時には「朝鮮進出の英雄」とされるようになる。しかし、大正時代に入り、朝鮮出兵が批判的に捉えられるようになったことから、明治以来の「国家の英雄」「海外進出の英雄」としての秀吉観は勢いを落としたが、一方で「大阪の偉人」として大阪では顕彰されるなど、歴史上の一人物としての人気は不動のものになっていった。大東亜戦争が始まると秀吉は「大陸、南方進出の英雄」として顕彰されたが、日本軍が劣勢になるにつれて段々と扱われることが少なくなっていったのである。

本論文では民間における秀吉顕彰の変遷を明らかにするために新聞、雑誌などメディア分析に重点を置いた。そして明治政府の意図した「国家の英雄」「海外進出の英雄」像に特に注目し、時代の変化に合わせて様々に変化していったことを明らかにした。しかし一方で、本論文では言及できなかったが、江戸時代から続く秀吉の「立身出世の英雄」「庶民の英雄」像はこうした時代の変化に流されることなく常に一定程度存在していた。そしてこうした秀吉観は現代まで変わることなく続いていることは最後に確認しておきたい。